

主日礼拝

2023年1月29日（日）

題 「メシア(救い主)の待望」

テキスト：ルカによる福音書3章15～22節

皆さん、おはようございます。

先週からわたしたちは洗礼者・バプテスマのヨハネについて学んでいます。

マルコによる福音書によれば、洗礼者・バプテスマのヨハネは、エルサレムから離れ荒れ野に住み、らくだの毛衣を身に着け、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていたと記されています。質素で厳格な生活をしていたようです。当時の特権階級となって形骸化したエルサレムに住むユダヤ教の指導者たち、聖書ではファリサイ派とかサドカイ派の人々が登場しています。これらの人々を厳しく糾弾していたと言われます。イエスも一時、ナザレの村を離れ、家族とも離れて、この洗礼者ヨハネのグループに入って学ばれていたと言われています。

今日のルカによる福音書の3章23節には「イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった。」と記されています。人間的に言えば、一時期イエスも洗礼者ヨハネの影響を受け、やがてイエスはヨハネの元を離れて、砂漠や荒れ野に留まるのではなく、一般民衆の中に入行って神の愛の業を行い、人々に神の言葉を語っていかれたのです。それが天と地をお創りになった神さまの意思であり、自分の使命であると自覚されたのです。

ところで、日本でも、鎌倉時代に一遍上人（いっぺん しょうにん）という人が現れ、成人して全国を裸足で歩いて民衆の中に入行って布教活動をしました。彼は四国松山に生まれています。時宗（じしゅう）を開いた人物です。わたしも30歳の時、生まれて初めて四国松山の教会に主任牧師として赴任しました。その地でこの一遍上人のことを始めて知りその生きざまに、イエスさまとの共通点を見るようで感動したことがあります。道後に一遍上人生誕の地と言われる宝巖寺（ほうごんじ）というお寺がありましたが、数十年前に焼けてしまって今はどうなっているのか分かりません。

一遍は踊念仏で唱え、踊念仏、念仏踊りは、日本の盆踊りの起源とも聞いたことがあります。一遍の有名な言葉は「捨て聖（ひじり）」と言われ、「捨ててこそ」という有名なことばがあります。名前は弘法大師や親鸞ほどは知られていませんが、どこかイエスさまの歩みを彷彿させるものがあり、親しみを覚えました。

主イエスは、人間の死と罪からの救いのために、地上に平和をもたらすために

十字架に自分の命を捨ててくださった神の独り子です。

さて、今日の聖書に戻りますと、自分の後から救い主、メシアであるイエス・キリストが来られることを力強く宣べ伝えたのが洗礼者ヨハネでした。

救い主（メシア）待望は、当時の民衆・イスラエルの民の中に熱く根強くあったようです。

旧約聖書の中にも、イザヤを代表としてやがてこの混乱した地上に救い主・メシアが登場し、誠の平和が実現するとの希望の水源・水脈があったのです。

先ほど読まれ聞きました、聖書ことばを見ましょう。

「15:民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。」

ここにも、民衆のメシア待望があったこと、そして民衆は砂漠に住み力強い宣教・ことばを語るヨハネ、罪の悔い改めのバプテスマ、洗礼をヨルダン川で行っているヨハネこそが、救い主であり昔から預言されていたメシアではないかとの声が上がっていたようです。それを知ったヨハネは、きっぱりと民衆の声を拒絶します。ここにヨハネの潔さと謙虚な姿があります。

普通であれば、人間は弱い者で、自己愛、自己慾に負け、自分を高く評価してくれる言葉に弱いのではないのでしょうか。昔であれば「末は博士が大臣か」と言われました。「あの人は、わたしたちの町の誇りである」とか。今はそういう声はほとんど聞かれなくなりました。価値が下がってきたのでしょうか。ちなみに今日、子どもたちが一番憧れるのは、「ユーチューバー」だと言われます。インターネットのY o u T u b eに自分で作った動画を乗せて人気ができる、またそれを仕事にしている有名な人たちがいるのです。

ヨハネは自分に向けられた民衆の期待を含めた声に対して、それを拒否し、語っています。

16:そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。自分は後から来る方の「履物のひもを解く値打ちもない。」と言います。当時、靴の紐を解くのは、奴隷の仕事であったようです。また、その方は「聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」と語ります。「聖霊と火」とは何でしょうか？

ここで、救い主・メシアの働きは「聖霊と火」で表されています。神さまの力である聖霊。清き霊。わたしたち人間の生活の中で働いておられ、その働きの内容は、悟し、慰め、戒、励まし、導く力です。そして神は最後に良いものと不要のものを分けられると言われます。火で表される力とは、わたし流の受

け止め方は、「火」は、すべてを燃え上がらせ焼き尽くします。神さまは憐み深く愛なる方ですが、侮ってはいけない方であるということだと思います。人は多少誤魔化せても、神さまは断じて誤魔化すことはできない方なのです。口語訳聖書のローマ人への手紙 11 章 22 節のことば「神の慈愛と峻厳とを見よ。」との言葉は、わたしたち人間がこの世を正しく生きて行く上で、いつの時代でもどのような状況の中でも必要なことだと思います。それ故、驕らず、卑屈にもならず与えられた命を感謝し全うしたいと思います。

また、救い主・メシアの働きについては、

「17:そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」と言われます。

これは、当時の農民の収穫時の最後の仕事の様子です。最後の収穫の時、実と殻を分けるために手に道具の箕を持って殻を飛ばし、大切な実を収穫するのです。殻は集められて焼き払われたようです。ヨハネにとってメシア・イエスとはそのような方だったようです。しかし、神から授けられた権威、この世的な最後の裁きは神に委ねて、暴力で自分の力を示すのではなく、イエスは自分を神の思いをこの世に言葉と行いで知らせ、その実現のために自分を献げ尽くされ全き愛に生きられた神の子だったのです。

「18:ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。」洗礼者ヨハネは民衆に語る宣教者でした。

ここで聖書は、急に当時ユダヤの王、ヘロデ大王の息子(ヘロデ・アンティパス)のことを語ります。

19:ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、

20:ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。

ヨハネは、王をも恐れずに糾弾する勇敢さから死をも恐れず王の悪事を暴いています。正義の人ヨハネは、王に逮捕され獄につながれ処刑されました。このような時代に神の独り子イエスは宣教開始して行かれたのです。

◆イエス、洗礼を受ける

21:民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、

22:聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、

天から聞こえた。

神から地上に遣わされた神の子イエスの活動がいよいよ始まって行くのです。そのことによって神さまの救いの計画が地上に実現して行ったことを聖書を通して私たちは学びます。日々、神さまの愛の力である聖霊の働によって心の糧を頂きながら、一人一人に与えられている「信仰と希望と愛のともし火」を大切にしながら生きて行きたいと願います。

皆様の上に、主の平安を祈ります。 共に黙想しましょう。